

佛國寺舍利石塔

關野貞

明治三十五年八月余が始めて朝鮮に遊び新羅の舊都慶州の古蹟を探りしとき、東京雜記により慶州の東南約四里、吐含山中に佛國寺と稱する伽藍あるを知り、遺物の存否を知縣其他の人士に問ひしも識る者全く無きにより、其有無の如何に拘はらず兎に角試みに往訪することゝした。

佛國寺は新羅以來の名刹たるに拘はらず、余の往訪せし時は伽藍は非常に廢頽し、僅かに一二の僧侶の居住する貧寺に過ぎなかつた。而るに最も奇巧を極めた新羅時代の石塔・石階段・刹竿支柱・石燈・銅佛・石舍利塔等は猶幸に遺存し、新羅時代の最も發達せる文化を表現せるを見て、驚喜の情を禁ずることが出来なかつた。大急ぎにて大體の調査を了し遺物の撮影をなし其夜晩く慶州に引返した。

其後明治三十七年余は東京帝國大學工學部の報告に於て「韓國建築調査報告」を公にし、中に此佛國寺に於ける新羅時代の遺物を始めて世間に紹介した。そして其一冊を當時開城在任の某氏（今故人）に贈つた。それは余が開城往訪中同氏の援助に負ふ所が少なくなかつた爲めである。

明治三十九年同氏は此佛國寺遺物の中、舍利石塔を寺僧より購入して之を東京に持來り、上野の精養軒の庭前に陳列して一般有志者に觀覽せしめられた。當時雜誌「國華」に其寫眞を載することゝなり、余は國華社の依頼により其解説を書いた。而も其後此舍利塔は如何なる運命を辿つたか余の全く知らざる所であつた。

而るに明治四十二年より余は舊韓國政府、引續き朝鮮總督府の囑託により、朝鮮各道の遺蹟遺物を調査することゝなり、再び佛國寺を訪ふて此舍利塔の散逸を惜んだ。其後佛國寺の名益高く、朝鮮に遊ぶ内外人は必ず其往訪を日程中に加ふることゝなつた。朝鮮總督府は明治四十四年の頃此舍利塔を朝鮮に取返し、佛國寺の舊位置に置かんことを企て、其所在の調査を余に依託された。余は先づ精養軒に往き問ひ訊せしも其行衛は全く不明であり、其後余は二十年來始終心頭にかけて搜索を續けしも得る所なく遺憾の念に堪えなかつた。

然るに近頃偶然の事からそれが東京の某氏邸に在ることが判り、去五月末、長尾欽彌氏の所有に歸したが、同氏はかゝる由緒ある貴重遺物を私藏するよりは朝鮮總督府に寄贈し、其本土に歸還せし

むるを有意義となし、七月廿二日増上寺に於て供養式を行ひ、不日朝鮮に送致せらるゝことゝなつた。こゝに殆んど三十年間本寺を逸出し轉寄の途をたどりし舍利塔が、再び故地に異彩を放つことゝなつたのは奇しき運命といはねばならぬ。

此舍利塔は元佛國寺

伽藍の後方、無説殿の西北なる毘盧殿の遺址の前面に立つてゐた。

余の始めて發見せし時は其形態全く石燈と同様なれども、火袋石に相當せる部分に窓口なく、且つ内部は普通石燈の如く洞開せず、随つて性質上石燈でないことだけは明かであるが、其用途並びに其名稱は詳でなかつた。而るに其後東京に將來さ

佛國寺舍利石塔臺石



調査の進行に伴ひ幾多の舍利塔及び浮圖の類が發見され、是等により此れは確かに舍利を藏むる目的を以て作られた所謂舍利塔又は浮圖と稱すべき者であることが明かになつてきた。

加之、其立ちし處は毘盧殿址の前であり、火袋様の四面には後に説くべきが如く、兩佛兩供養天の圖像が彫刻されてゐるから、無論僧侶の遺骨を藏する所の浮圖にあらずして、佛舍利を容るゝ所の舍利塔であるとの想定がいよゝ／＼確となつてきたのである。

此舍利塔は全部稍赤味を帯びた粗質の花崗石より造られ、其形は普通の石燈に尤もよく類似してゐる。先づ下

れし際、組立前に一覽せしに、中臺石の上面に圓形と長方形の穴が接着して作られてあつた。恐らくは圓形の穴は舍利壺を、長方形の穴は經卷の如き者を藏めたのであらう。是れにより此者は或は舍利塔では無いかとの疑が起つた。而るに其後朝鮮に於ける古蹟遺物の

に八角の地臺石各面廣一尺三寸五分が地盤の上に据えられ、各面に一種の眼象ゲイゾウが刻まれてゐる。此地臺石の上に九角九瓣の覆蓮座が作られてゐるが、蓮瓣の手法は割合に鷹揚に出來てゐる。此覆蓮座高八寸五分の上部には低き二段の刻み出しがあり、其上に石燈の竿石に相當す



佛國寺舍利石塔各龕

る東石高一尺六寸三分が立つてゐる。此東石は上廣く下窄くして湧上下徑一尺四寸三分がれる雲の狀を高肉彫に刻み出し、是れにより其上なる中臺の仰蓮高八寸三分上面十角形各面廣七寸七分を支承してゐる。此仰蓮は十角十瓣より成り、各瓣豐肥にして瓣面中央に花形を作り頗る秀妍の趣を示してゐる。中臺の上部には少しく水垂を作り且つ蓮房の形をあらはし、塔身との間に二十顆の蓮子様を陰刻してゐる。

中臺の上には石燈の火袋に相當する塔身高一尺六寸七分底部徑一尺四寸四分が載つてゐる。此塔身は平面圓形胴部膨れて鼓形をなし、上部には狭き蓮花様帶を繞らし、其下を四本の柱様によつて四區に分ち、各區上部に華頭様を作りて佛龕となし、隣接せる兩龕内に各坐佛像を容れてゐる。其一是降魔相の釋尊をあらはし、他は何佛であるか明かでないが、恐らくは多寶佛であらう。兩佛共に背光を有し、前者の蓮座は特に豐美なれども後者の蓮座は稍簡單である。

他の兩龕内は供養の天部の如き圖象を彫刻してゐる。或は梵天帝釋天か。向つて左方の者は寶冠を着け吉祥天などの如き服裝をなし、右手に三鈷様の者を捧げてゐる。右方の者は同様の服飾をなし、兩手を胸邊にて拂子の如きもの、柄を水平に捧げてゐる。是等の佛菩薩様は何れも浮彫にして手法精鍊、頗る溫麗優雅の風手をあらはしてゐる。各龕を界せる柱様は何れも其面に蓮花や寶相花様を陽刻して裝飾としてゐる(挿圖參照)。蓋は軒端十二角形なれども、其頂の露盤は六角形となつてゐるから、蓋の六角の隅の稜線は露盤の隅角に向ひて稍高く作られ、其中間に當れる稜線は軒より起りて屋根の流れの途中に消失してゐる。随つて軒附のびの反りは中間角の處に少く、隅角

の處に著しく多くなつてゐる。此の如き屋蓋の形は他に全く類例を見ず、當時工匠の意匠の縱横なるを見ることが出来る。蓋の上面の流れは勾配少く爲めに輕快の觀を呈する。其裏面には塔身を繞りて八葉の蓮花を陰刻してゐる。露盤の上には今扁球様にして胴部を紐帶にて縛し、四個所に花形を刻み出せるものを載せてゐる。其上に當初寶蓋寶珠様のものがあつたのであらうが今失はれてゐる。

今此扁球様と蓋とを貫通して塔身の上部まで穿たれた孔が遺つてゐる。孔の徑一寸六分五厘、深き扁球上より塔身の孔の底まで一寸四分ある。恐らくは當初金屬の杆を嵌挿して其上の寶蓋寶珠様(今亡はれてゐる)を支持する爲めに作られたのであらう。

要するに此舍利塔は其地臺石上の覆蓮が稍粗大に失せる外、權衡も美しく各部に施された彫飾も優雅にして洗鍊された技工より成り、新羅時代中期の特色を發揮してゐる。加之、其地臺を八角形となし、其上の覆蓮を九瓣となし、東石を圓くして頭大に脚小なる柱狀をなさしめ、中臺の仰蓮を十瓣となし、塔身を鼓胴様となし、蓋を一種の十二角形となし、露盤を六角形となせるなど、層々意匠を異にし變化の妙を極めてゐるのは良匠苦心の存する所にして、當時新羅藝術の發達の如何に著しきものがあつたかを示すものである。